【無料配布】短編ミステリ　～文学フリマ広島８書き下ろし～

中央と地方との文化的格差

作：庵字（あんじ）（新生ミステリ研究会会長）

「今度の俺の新作には、読者参加企画が付くことになった。雑誌に〈読者への挑戦〉までが掲載されて、解答を読者から募集するというものだ。最優秀正答者一名には、今時の業界としては結構頑張った金額が出る。そこで、だ……」

やつの口調が真剣味を帯びた。何を言い始めるのか、俺にも想像が付いた。

「お前に解答を送ってもらいたい。もちろん……〝正答〟は俺が教える」

ようは〝カンニング〟というわけだ。

「俺とお前との関係が明るみに出ることなどありえないからな」

ある日、酒場で隣席になり、ひょんなことから共通の話題で盛り上がった相手がミステリ作家だったとは。俺も、当然やつも、互いの関係を他の知人に打ち明けていないことは間違いない。なにせ、盛り上がった〝共通の話題〟というのが、違法賭博だからだ。とある反社が経営する賭博場が近くにあり、俺もやつも、その帰りにふらっと居酒屋に立ち寄ったのだった。

「当然、分け前は半々だ」

やつの言葉に俺が頷くと、向こうも具体的な説明に入った。

「掲載誌は紙媒体だけの文芸誌で、電子版は出していない。雑誌の発売は来週の火曜日。だから、お前は来週の火曜日の昼過ぎくらいに、俺が教えた〝正答〟を、お前なりの言葉に変換したものを書いて速達で送るんだ」

「火曜の朝にすぐに送っては駄目なのか？」

「馬鹿言え。どうしたって問題編の小説を読んで、考えるだけの時間――言うなればアリバイ――が必要だろ。この企画は早い者勝ちじゃない。解答の内容が選考事由になる。これこれこういう推理で犯人とトリックに行き着いた、という根拠が必要だ。どんなに早く送っても、推理がめちゃめちゃだったり、いかにも当てずっぽうで犯人を指摘したような解答は弾かれる」

「なるほどな」

「が、送られてきた推理が同レベルで競った場合は先着順が採用される。速達にするのはそのためだ。だから、雑誌発売日の昼過ぎというのは、問題編を読んできちんと推理をしたというアリバイと、早い者勝ちの条件を満たす最適な時間というわけなんだ。その文芸誌はコンビニや駅売店には置かれない。書店だけだ。書店の開店が午前十時として、ちょうどいい時間だろう。解答は郵送のみだ。メールなどのネット経由では受け付けていない」

俺は承知して頷いた。俺は来週の月曜から、さる地方都市に出張で二泊するため、解答の郵送はその地方都市から行うことになるが、問題はないだろう。

そして翌週の火曜日、俺は出張先での仕事の途中で郵便局に立ち寄り、かねてから用意していた〝解答〟の入った封筒を速達で送った。

――万事抜かりはなかったはずだった。が、その雑誌の翌月号のベスト解答者欄に俺の名前はなかった。どういうことだ？　俺は、やつに連絡をとった。

「馬鹿なミスをしたな」

やつの第一声はそれだった。ミス？　俺はやつからもらった〝正答〟を、俺なりの言葉に変換して子細漏らさず書いたはずだ。齟齬はないはずだった。

「確かに、お前の解答は完璧だった。が、投函した場所がまずかった。どうして出張のことを俺に教えなかった？」

「場所？　まさか、その雑誌は俺が行った出張先では売っていないとか？」

「違う、全国どこの書店でも販売はされている。が、問題になったのは発売日だ。お前の出張先の地域では、あの文芸誌は、首都圏よりも二日遅れで店頭に並ぶんだ！　消印の郵便局と時間から考えて、雑誌を読めたはずのないタイミングで完璧な〝解答〟が来たものだから編集部は怪しんだんだ。結果、俺も疑われて、ちょっとマズい立場になりそうだ……」

実際に問題編を読む必要などないのだから、俺はわざわざ出張先で書店に行きはしなかったのだ……。

（了）

お読みいただきありがとうございます。

「新生ミステリ研究会」け―15にまたお越しください！

ホームページ